

令和三年十二月十五日(水)

久しぶりにオリンピック青少年センターでの句会を再開した。

兼題『焚火』 席題『立』。

首藤 しずを

粗朶をつぐ影絵となりて焚火守
にぎはひてやがて声なき焚火かな
するすると小猿になりて松手入
立冬の鮎ゆつくりと釣られけり
夕映えて白山茶花の極まれり

森田 元斐

棲み分けし日陰に足りる花八つ手
乱曲の獅子の地団駄年の暮れ
息ひそめ濡れ灰を追ふ炭点前
湯豆腐を囲む一間の小宇宙
一筋の焚火揺るがぬ棚田かな

安藤 晃二

名石の汀に重し冬日和
苑真中名残りの桜紅葉立ち
冬ざるる犀の巨体やばりに湯気
山伏は火の粉蹴散らし焚火踏む
山査子の実はむらさきに冬深む

大津 そうかい

羽ばたける鳩や光のしづき燦
雪虫や化石を抱く大理石
日の落ちて瞳に映る焚火かな
年の瀬や筆の進まぬ悔み状
寒暁や子の出立を送る母

斉藤 まさお

行きずりに知らぬ同士の焚火かな
夕映えや生きし涯なる冬紅葉
五能線降り立つ駅は雪しまき
年の瀬やポテトサラダに隠し味
冬晴や富士白妙の田子の浦

高橋 由紀子

冬暁に二羽の鷺立つ影絵かな
名優の逝きて一折り白南天
残月を横切り冬の始発行く
冬日の出飛ぶ鷺も朱色に染まりけり
釣り談義愉しや焚き火空のびく

中村 晃也

立ち枯れの櫛の大樹神の杜
皆去つて独り焚火の後始末
流木を集め漁師の浜焚火
くすぶつて涙混じりの落葉焚
消えてから何台も来る消防車

新田 ゆふき

行く秋の月蝕見上ぐ旅の駅
秋寂びて山上堂宇玉の水
アムールに立つ川波やしづき凍つ
生れし家材木屋なれば夕焚火
鴨の割る池の鏡や散り紅葉

長尾 進一郎

訓練の犯人弱し駅師走
参宮橋落葉踊れる舗道かな
父親と当れる焚火見上ぐほど
筋取りの手間の嬉しや蜜柑食ふ
のんびりと集ふ水鳥急に立ち

宮原 凧

冬ざれや身に覚えなく青きあざ
参道の照葉や炎の色たてて
持て余す白菜一つ転がせり
落ち葉掃く「たき火だ焚火」口遊ぶ
極月や吾の体内の砂時計

志村 良知

梅畑に場所の定まり大焚火
焚火の香昼餉の卓に漂へり
店主病むの貼紙黄ばみ時雨かな
恩師米寿帰路に鯛焼手に温し
川霧の立ちのぼるなか己が影

内藤 あした

帰り道富士の見えいて冬夕日

真つ黄色の落ち葉の道をスポーツカー

干し柿にとろりと蜜の袋あり

登校日焚火だ焚火手をかざし

立ちこぎで坂道上がる師走かな

西川 知世

根上りの松やさりさり落葉掃く

置炬燵据えて読み初む立志伝

着膨れて地酒選りをり香に酔ひつ

五輪塔に地の湿り伸び冬めける

焚火果つ闇の深さを漲らせ

今回は、令和四年一月六日(木)です。

兼題は、首藤しずをさん出題の『初』です。

季語を学ぶ 初学にかえつて

西川 知世

新年句会にふさわしく「初」の字がつくもの一切が兼題として挙げられた。来年こそ、本格的なコロナウィルスの終息に向かう新年を祈る。

歳時記には春夏秋冬に加え、新年という季節の括りがある。春は立春の日から立夏の前日まで、夏は立夏の日から立秋の前日まで、秋は立秋から立冬の前日まで、冬は立冬の日から立春の前日まで

でとなる。それに加えて新年という季を設けている。陰暦では、春は一月と三月、夏は四月から六月、秋は七月と九月、冬は十月と十二月であり、いま私たちが使う暦、陽暦では春は二月から始まる。きわめて紛らわしい。若い人たちが俳句にまず躓く所である。新年という括りは正月に關係のある季語を取り出し集めている。旧正月は陽暦の二月だが、新年の項目に入る。自由闊達に正月を満喫するのが現代の潮流であり、時代の流れとともに斬新な挑戦句も生まれてくるだろう。

初雀翹をひろげて降りにけり

村上鬼城

初日さす硯の海に波もなし

正岡子規

初日差しこの美しき地球(ほし)に住む

桂 信子

傷一つ翳一つなき初御空

高浜虚子

初凧やものこのほらぬ国に住み

鈴木真砂女

日本がここに集る初詣

山口誓子

初暦知らぬ月日の美しく

吉屋信子

書初やべたべた赤き鯛車

石田波郷

買初の小魚すこし猫のため

松本たかし

おとなしくかざらせてみぬ初荷馬

村上鬼城

初湯出て赤子そのまま湯気菩薩

中村美恵子

空容れて旅の乙女の初鏡

大串 章

立ちざまに面をとられたり初稽古

村山初桜子

初夢のなかをどんなに走つたやら

飯島晴子

職を得し町の小さな出初かな

加倉井秋を

初天神黒き運河を越えて来ぬ

村山古郷